

甘すぎる行財政改革案

マイシティ芦屋

発行者
 芦屋市議会議員
 徳田直彦
 芦屋市大東町
 18-6-915
 電話
 0797-23-1149

**本気が疑われる行財政改革案
 10年でたった目標40億円**

**令和元年の基金120億円が
 10年後に30億円に減少!**

平成15年の芦屋市政非常事態宣言の折、芦屋市は行財政改革計画を策定し取り組んできました。

その後、一時期は芦屋市の借金である市債発行残高は五百億円を切りましてきており、今後の財政

状況は危ぶまれるようになってきました。更には不交付団体に昨年指定される、ふるさと納税による市税収入



経済

の右肩上がりを前提にするな!

の減少など減ることへの見込みは、そして今策で基金減りました。

この様に支出は必ずしも減らさず、しかし基金は将来底非常に厳し。

一方、行機感を抱いていますが、トップは残から言われかメンツに

るのか本気が。そして昔改革案も私

指摘があり、い腰を上げとして、自発的に持つて検

ていないと問題です。その様な

は6月定例政再建と行

様、最高青長・副市長

コロナウ

世界経済の

に危ぶまれ

それは今

められる行

たな視点が

ことに繋が

定常

従来、都

により歳入はあっても増えりません。四、コロナ対り9億円支出

今後不意の起ります。の備えたる基をつくという見込みです

以内部でも危

ている職員は

心の芦屋市の

念ながら議

の嫌なの

の姿勢が見

屋市の行財政

運議からの

ようやく重

て策定し

ものです。

且つ危機感

討しようとし

ころが最大の

空社会

ていませんでした。しかしこれからの人口減少社会はそういうわけにはいきません。

さて定常型社会という言葉をどう存じでしょうか。

定常型社会は思想家である山崎正和氏を初め科学史家の広井良典氏、物理学者の岸田一隆氏、エコノミストの水野和夫氏などが提唱しているテーマです。

山崎先生の定義では定常型社会とは「人口と経済の成長が限界に達した社会であり、その事実を受け入れ、これ以上の経済成長を求めようとしない社会」です。

SDGSではないですが地球資源の食欲な消費と地球温暖化に見られる様な環境破壊から脱却し持続可能な成長を目指す思想は以前からあります

が定常型社会は更にそこから進んでいます。

山崎氏を初め広井氏、水野氏らに共通しているのは現代社会が過去に例がないほど崖っぷちに立っているとの強烈な危機意識です。

ただ定常型社会への移行といっても実際には相

当な困難があることは容易に推察出来ます。

私達の心一つをとって

みても利己主義を捨て不

便さを享受出来るか、成

長がないというこ

いて我慢出来るかとい

たことを克服しなければ

なりません。しかしそ

は誰一人疑つ



数値化され ない目標

たとするならばその中で逆行して芦屋市だけが発展し続けるわけがありません。

例え人口が仮に5%少なくなるといことは消費人口が5%少なくなるといことです。同時に納税者が5%少なくなるといことです。納税者が少なくなるといことは芦屋市の税収はどうなるでしょう。

地域内GDPに多大な影響をもたらします。そして今後はコロナ過による厳しい財政状況が追い打ちをかけます。

行政幹部は今までは震災も乗り越ったとか、財政非常事態宣言も行軍で乗り切ったといった過去の成功体験で今後も通用すると思っっています。

しかし果たしてそうでしょうか。そんな保証は何一つありません。

さて行財政改革を含めおよそ計画というものには具体性がなければ又具体的目標が数値として示されていないければ絵に描いた餅であり意味がありません。

しかし今の新行財政計画案では10年間の効果額として40億円以外の数値は示されていません。

この40億円という目標は芦屋市が10年後、30億円弱の基金を維持したいという数値です。

マイナスだけは何かと避けたいという目標です。それほど悪化している芦屋市の財政状況です。

10年間で効果額40億円というのは目標としてあまりにも小さ過ぎます。



最初この数字を示された時、桁を間違えているのではと思いましたが、せめて百数十億円という数字を期待しておりませんでした。

一年間でたった4億円では芦屋市行政が本気で行財政改革に取り組もうという姿勢ではないということですね。

そのくせ、行政は今まで1メートル80万円かかる無電柱化とか事業規模数百億円の阪神電車の立体化とか打ち出してきました。

更には問題となっていない予算が膨らみに膨らんだJR芦屋駅南地区の再開発計画です。

本当に能天気だと思えます。

ましてや今、西宮市と進めているごみ処理の広域化（ごみ焼却場を西宮市と共同で建設しようとする計画）がとん挫したらまた巨額の事業費が発生します。

これらは芦屋市の長期財政収支見込に入っていない。

また必ずと言っていいほど行政改革には組合をはじめとする左派政党などから抵抗があります。過去もそうでした。

職員数を減らすなどか種々色々な形で圧力をかけてきます。

そういった抵抗勢力からの圧力をはねのけ、今の芦屋市民に、そして未来の芦屋市民に人、もの、金といった資源を残していくことは為政者としての最低限の使命、責任です。

組織のスリム化をはかれ

行財政改革もコスト削減型、緊縮型、節約型、成長戦略型等ありますが成長戦略型などと恰好をつけている状況ではありません。

成長戦略型は一見聞こえは良いですが中身は乏しく具体的な成果は得られないケースが多いのです。

それは芦屋市を見つめ

せん。

ここは正攻法でコスト削減型で取り組むしかないのです。

そこで手始めは行政のスリム化を図る事です。

企業経営でも同じですがその組織実態、財政の実態を直視せずに追い込まれるたびにリソースを投入する組織は結局、今以上に深刻な経営危機に追い込まれてしまいきます。

本市も切り売りする様な資産は殆どなくなりま



れば直ぐ分かりますが企業を誘致するような大きな土地がどこにあるでしょうか。

現実を直視しない夢物語に踊らされてはいけません。

組織のスリム化です。

さあ問題はここです。

抵抗は相当あると思います。芦屋市は自滅してしまいかねません。

職員の定数管理、地域手当、ラスペイレス指数の適正化を行うための各種制度の見直しを初め人事施策、これらをまず早急に行わなければなりません。

まさか少子化を受けて今後、発生するかもしれない教育施設の余剰を売却に当てる様なことはないでしょうか。

つまり歳入の拡大方法は現実には殆どないということであり、そしてその上に立った施策の展開です。

まずは歳入の増加がない、減少するだろうという前提に立った、身の丈に合った歳出つまり経常支出、固定支出の抑制を

言葉の羅列ではなく、目指すべき未来の具体的なイメージ像を明確に示し、各具体的取り組み、プロジェクトは数値化による目標設定を行わなければ真の行財政改革は行えないと思います。

今後市民の皆様のために芦屋市政が発展するように訴えてまいります。

芦屋市のパウハラ問題

昨年から幹部は知っていた...

芦屋市の幹部職員がパウハラの問題についてこの度、市議会として監査請求を行いました。

6月定例会の中で大塚議員がこの件について取り上げましたが芦屋市当局は「個別の案件については答えられない」との答弁を繰り返すのみで全く答えようとしませんでした。

そのような事実があったのかどうか、調査の結果どうなのかということすら芦屋市は明らかにしませんでした。

市長もその後職員向けにメッセージを出しましたが、その内容はこれから調査しますとしか受け取れないような内容でした。

しかしながら昨年の8月に約10人の職員から連名で訴えがされているにも拘らず10か月以上が経過しています。

今年7月2日の共同通信は「昨年9月に事態を把握した伊藤舞市長が幹部を統括させた上で、職員に対して自分たちで調べてほしいと発言していたことが今月1日市関係者への取材で明らかになった。市長は取材に対し答えられないとしている」と報道しました。

ということは

①昨年からの知っていたにも関わらず放置していた、あるいは問題としていなかった。

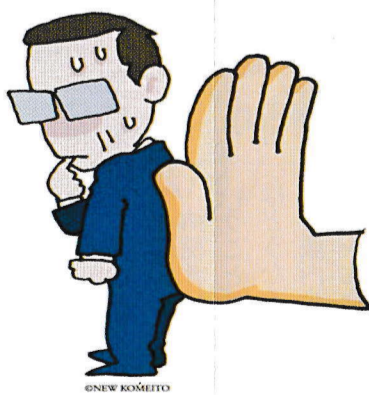
②自分達で聞えとは一体どういうことなのか。

という事です。

誰と聞えというのでしょうか？

パウハラを行っている上司と聞えて自分達だけで解決せよとも言っているのでしょうか？

当たり前ですがその上司の最終的な上司は市長です。



ず道筋もつけない、そして自分たちで何とかしろというのは全く責任感が欠如していると言わざるをえません。言語道断です。

なぜここまで言うかとお思いの市民の皆様もいるかと思いますが実は若手職員からは職場風土の閉そく感の声が聞こえて来るからです。

職員の意識が変わりやる気を持つて仕事に臨む職員が増えなければ市役所は良くなりません。

そして市役所の体質が良くならなければ芦屋の施策遂行に支障をきたします。

また委員会の中で行政は訴えについてデータ管理すら行っていないことが分かりました。これでは案件の時系列さえ正確におさえられません。

また万一、パウハラにより芦屋市が行っている各種事業の方向性について歪められているようなことが判明すれば絶対に看過できません。

今回のパウハラ事件について議会として総務常任委員会で徹底的に調査をしていきます。

この様なこともありこの度、議会として監査請求を行いました。

尚、共産党は自ら監査委員を出しておきながらこの監査請求については反対をしました。

そして党派「芦屋市民の声」の長谷、中村、孝岡の3名は監査請求の採決の際は退席するという態度でしました。

市長と党を任じているのかどうか知りませんが行政の監視機能は議会としての大きな役割です。

私は執行機関としての行政が正常に機能するよう議会として使命を果たしてまいります。

芦屋市政に関してのご意見、お困りごとなどがございましたら、どうぞご連絡下さい。

電話 090 3929 6316



編集後記

今年、亡くなったプロ野球の名将野村監督は開き直りとややくその違いについて日本シリーズでの有名な江夏投手の無死満塁のピンチを切り抜けた例を挙げ、このように語っている。

「よく開き直ってやれというアドバイスを聞くけれど実はそのほとんどが開き直りではありません。何も考えず夢中でやっているだけなのです。大抵『やけくそ』でやっているだけです。

『やけくそ』にはち密な計算は無く、単純にがむしゃらにやったら運よく成功しただけです」

土壇場を切り切るには単純な勇猛ではなく冷徹な計算の上に立った捨て身の精神こそが勇猛であり開き直りということなのだろう。

日常の努力が土壇場での執念となりそれを確固とした信念に基づき実行に移すそれが「開き直ってやる」こととも述べている。

本当にその通りだと思う。人生には幾度となく艱難がある。

その時こそ人間の真価が問われる。悩み抜き、考え抜き、そして断固として事に処していききたい。